

# 教育実習事前指導における

## 「五歳児の記録」の活用について

大戸美也子



本誌64巻2号（昭40）より65巻7号（昭41）に、磯部景子、堀合文子、津守真「四歳児の記録」及び「五歳児の記録」を掲載してきた。それは幼稚園における四歳児三学期より五歳児の一年間の毎日の保育の観察記録であるが、この論説はその「五歳児の記録」を保育短大の演習に活用した報告である。

子どもについてほんの少ししか知らなかった者が「幼稚園は、子どもがいま必要としているもののために備えられている」<sup>注1</sup>のであり、「幼児にその年齢水準として成長に必要なと考えられる経験を与えてやることにより、幼児の要求に答えてやることである」<sup>注2</sup>ことを知り、「幼稚園に子どもが適応するための大切な鍵を教師がにぎっている」<sup>注3</sup>と認識して、「幼児をありのまま見、それをひとりの人間として接するところから出発」<sup>注4</sup>する時に、幼児の満足した生活と幼児の最善の発達を見通すことができ、「どのようにしたら幼児に満足のいく充実した生活を送らせることができるか」<sup>注5</sup>を考えることが大切な保育技術であることを理解し、

「幼稚園のプログラム（指導案）をたてるにあたり、個人差を考えることは基本的なことである。この原理にしたがうことは計画に柔軟性をもたせることを意味し、だれもがみんな一斉に参加するような活動をほとんどおかないことである」<sup>注6</sup>という考えに成長していく姿を見るのは、すばらしいことである。

保育科を志望する学生の多くは、「子どもの素直で純真な心にひかれて」入ってくる。子どもが大好きではあるが、幼稚園は一体なにをするところなのか、幼稚園教師にはどんなことが大切なのか、いいかえれば保育科に入って一体何が始まろうとしているのか、わからない者の方が多い。しかし学生は、幼稚園の

子どもたちがどんなことに関心をもち、どれ位のことができるのか、また幼稚園教師としてどんなことを知っておかなければならないのか、そして幼稚園で実際にどんなことが行なわれているのかを知りたがっている。「五歳児の記録」<sup>注7</sup>は、このような学生の幼児教育に対する期待と要求とを満たすものであり、学んで欲しいことを盛り込める適切な素材である。以下、「五歳児の記録」を活用したゼミナールでの学生の発言を中心に、彼女らの成長の過程をおつてみたい。

教育実習時に残る者<sup>注8</sup>を対象に実習ゼミナールを行なっているが、そのゼミナールのテキストとして「五歳児の記録」一学期分を小冊子にまとめ、活用している。「五歳児の記録」の活用のねらいについては、あらかじめ決めておかず、第一回のゼミナールにおける学生の反応を見て、学生が最も関心をよせた事項、発見の多い事項、発展性のある問題を参考に幼児優先の保育の理論と応用的態度を養うことを念頭において、後に示す三つの柱を課題として設定した。次回からはその三つのねらいに焦点を合わせながら話し合いがすすめられた。第一回のゼミナールの記録をもとに実施のようすを見ることにする。

実施例 五月二十三日—64巻2号参照—

導入(記録の主旨「四歳児三学期の記録」の冒頭<sup>注9</sup>から引用して

紹介し)今回は四月新学期初めから五月初旬までの約一か月の記録を読んでいきます。途中子どもや先生の話したり動いたりしたことの中で、気がついたことをメモしておきましょう。

展開(一)全体を四月十六日～二日、四月二十八日、五月十一日、五月四日～八日の四段落に切つて、各段落毎に、読後、直観的感想を簡単に記す。

(二)全体を読み終えてから、四、五人ずつグループを作り、バズ法で各人の感想をもとに話し合う。

(三)五、六分後、話し合いを中断して、各グループの座長から話された内容について簡単に報告してもらおう。

#### ●話し合いの感想

- ・三歳児は自主的にふるまえない。
- ・先生は子どもを引きつけるのが上手である。
- ・先生がそばにいと安心感がある。
- ・子どもは細かい観察力がある。
- ・リズム遊びによって幼稚園生活になじませている。
- ・先生の話し方に子どもがのっている。
- ・指導の仕方が幼児の発展づけになっている。
- ・子どもの創造性(力)はするどい。
- ・毛虫への応対が自然である。
- ・五歳児は自発的に行動ができる。

・先生の応対の仕方が自発性、創造性をのばす。

(四)これらの話題をもう一度グループへかえして、特に今後研究していきたい事項についてバズ法で話し合う。

#### ●学習の課題

(1)五歳児の行動特性を知る。

(2)教師の子どもの状況をみつめながら計画をたてて実現していく過程をとらえる。

いく過程をとらえる。

(3)子どもにおける創造的活動を発見し、教師の誘導の技法を発見する。

以上の課題が回をおってどのように話し合われたか、特に課題

(2)と(3)について具体的に示してみよう。

課題(2)教師の子どもの状況をみつめながら計画をたてていく過程

四月二十八日から五月二十二日までの記録では、次の三つが代表的場面として話し合われた。

1 ヨット作り(四月二十八日火曜日)―64巻6号参照―

この部分については、E.e.のかなり克明な指摘があるので、まずそれを引用してみよう。

〔先生の意図している計画はペープサート作りであつたらしいが、子どもの行動からみてあまり発展しそうなものもないようすであ

つたらしい。先生は紙をもって歩いているTに「Tちゃんその紙何かになりそうね」という助言を与えて、そこでTは初めて創作意欲にかられたと思われる。というのは、ただ何の目的もなく、(あるいは思案中なのか)持っている」と記されているし、何かのきっかけで自分のボンヤリと思っていることが他の助言で目的が明確になるような場合もあるので、この時の先生のチャンスの捕え方は実に鮮かであると思つた。

それからTは「階段になるよ」とヨットとはおよそ無関係なことをいったが、先生の言葉、助言のきっかけで何かを考えつき、思いつき、再び「窓でこういうとき使うのね」といっている。先生の次の発言「そういいわね」は以前と同じ言葉で応対していたが、それ以上幼児の行動を左右する言葉はかけず、他の子Yに話しかけている。これは、Tに考えさせる創造創作を自主的に与える最大の意義ある瞬間だと解釈した。しばらくしてTは「どうやろうかな」と考えているようす。しかし先生は「どうやたらいいかしら」としか答えていない。一見不親切そうに見える。これらの会話は、あくまでも幼児の自発的行動の発達の助成のみで、Tの生活において直接自発的思考の経験を体験させるように指導しているのであろう。

しばらく間をおいて、Yがヨットを作るらしいことを見て自分も結局ヨット作りを始めた。(略)しかしそこまでの過程に

終わらず、ヨットの帆となる教材をもってきた。(略)Tは帆をつけ終わって先生を探しに行き、そこで色を塗った方がよいとか、樫みたいなものをつけた方がよいと助言を受ける。この助言のおかげでそのヨットはようやくヨットらしくなり一段進んでそこから創造性を引き出していき、Tはそれに関する港を思いついたのでないかと思う」

このEの分析から「ヨットができるまで」には五つの過程をふんでいることがわかる。

- ①「Tちゃん、その紙何かになりそうね」
- ②「そうねそれもいいわね」「どうやったらいいかしら」
- ③「Tちゃんたち布もあるわ。三角やこういう布、帆になるわよ」
- ④色を塗った方がよいこと、樫みたいなものをつけた方がよいことなどを話す。

⑤T「うん、みなとかこうかな、箱で」……先生はTたちのつくっているようすを見て大きい青い紙を出しはじめ。

①において先生が発した「何か」という言葉は「子どもたちにとってあらゆる知恵の選択をまかされた」(Nh)のことであり、②において「肯定的、提案のない方を基盤として、ヨット作りが展開していく」(Th)のである。Ymは①、②を指して「ことばの教材」とし、製作がさらに発展していくためには③、④にみられる「物質的教材」の必要性をといっている。③、④の提案がTの港

作りを自発的に生み出したこの過程は、子どもと先生との働きかける関係の発展的な展開と思われる。

## 2 機重機・つり竿・電車をつくる

(五月二十日水曜日)——65巻1号——

何かはじめたいという意図が見事に実を結ぶこの過程は多くの発言が見られたが、Yは段階をおって次のような説明をしている。

①糸まき、厚紙の箱に模様を書いたりしながら、子どもの活動を見ている段階……このことによって子どもは作業に注目し、そこから創造性を出させようとしている。

②「糸まきがいっぱいあるでしょう」と答える段階……「何を作っているの」という質問に対するこの答には、子ども自身が素材を見て感ずることを大切にしている。そのことが創造性を伸ばす大切な役になっている。

③Yの起重機、Hのつり竿、Tの電車など作られたものへ助言する段階……子どもの身になって作ったものを考え見てやり、アイデアを加えることによってできたものをさらによいものへと思っていくと同時に創造性の発展を促している」

Ymの指摘した第二段階の「糸まきがいっぱいあるでしょう」という発言はO・sやO・jのように「糸まきを利用して作ったもの」を子どもに知らせなかったからではなく、先生は子どもに糸まき

を認識させた」(O。)「先生が作っているものではなく、糸まきで何ができるかという方に子どもの興味をそそらせた」(O。j)のであり、その結果、「Eの創造力へ働きかけ、そばで聞いていたYの舟の作業の中に新しい発見のキッカケを与えた」(Y)と考えられる。ここでは、製作過程をその準備段階から順をおってとらえ、教師の発言の解釈も適切さを増し、教師と子どもとの動的関係がとらえられている。

### 3 石あつめ、時計をつくりはじめ

(六月九日火曜日) | 65巻3号 |

子どもたちの石あそびから時計づくりまでに発展する過程であるが、ここでもやはり次の段階を経ていることが指摘された。

- ① 第一段階 (大きな石をいくつか出して机の上に並べる。K。①の質問に対して「何かにしたいわね」何になるかしら……子どもの石あそびに対する、また石の形に対する反応である。(Ym)
- ② 第二段階 (「何かかいてみたらどうかしら」……材料は先生自身が提供しているが、石を作ったの具体的発展の方向づけをしている。(Ym)
- ③ 第三段階 (小石を拾いに庭に出る。「顔を書こうかしら。顔をかきましよう」……新しい材料を与え、囲りの子どもに、ちょうど聞こえる程度のひとりごとは雰囲気をもりたてる。(Km)

④ 第四段階 (「あら④ちゃんおもしろい時計できましたね」「箱でも時計ができるわね」……子どもの活動に必要なだと予測される教材をあらかじめ用意して、すぐそれを子どもに与えることができるようになっていたことが、子どもの発言を先生のねらいと合わせることでできた。(Sh)

三つの場面を見てみると、そこに一定の法則性があることに気づくのである。

- (1) 子どもの中心的な要求に焦点を合わせる働きかけのあること
- (2) 子どもの関心を確かめる提案や発言のあること (1の②、2の②、3の②)
- (3) 製作に必要な材料を積極的に提供する段階のあること (1の④できたものをほめて、助言や新しい材料を与える段階のあること (1の④、2の③、3の④)

子どもも先生も「何がやりたいのか」をつかむのになっぶり時間をかけて、自発的に決定された時には敏速に反応することが活動を発展させる要因であることも合わせて推測される。

課題③子どもにおける創造的な行動を発見し、教師の誘導の技法<sup>注10</sup>を発見する

「五歳児の記録」は、T W が感想で述べているように「子どもの行動のすべて、先生のことばのすべてが創造的であり、創造性を伸ばすものであり、特に選ぶ個所がないように思われる」程に、課題(3)を追求するには格好の素材である。

五つの質の異なった場面について、子どもの創造的な行動とその基盤、先生の反応を一覧して、その内容を後で解説することにする。

場面	創造的な行動	先生の反応
①鯉のぼりづくり	<p>④朝、ちぎり紙をはった鯉のつくりかけを机の上においてある</p> <p>②大きな、作り方は子どもも要求に応じて自由にする。</p>	<p>「こういふ鯉のぼりもいいわね」と皆に見せる。</p> <p>「⑤ちゃん、おもしろいものをつけたわね。略 ⑤ちゃんよくおさかなみていたのね」といろいろに考えた子どもたちをほめて皆にみせる。</p>
②バラのとげと蜂	<p>子どもの創造的な行動</p> <p>・黒い紙をちぎり紙にして、うろこつきの鯉をつくる(E)</p> <p>・ひれつきの鯉をつくる。(⑤)</p> <p>・紙をきって目のところを工夫したり、口や尾びれをつけた鯉をつくる。</p>	<p>先生は子どもたちを見て花になり「ブン、ブン、蜂がとぶ」とうたいながら両手を高くあげて、花になる。</p>
	<p>・バラのとげを鼻の上にのせて、①、④、T が「蜂」になって、先生のところへ走っていく。</p>	

クレヨンで高速道路をかく	④自動車組みたて	③絵を描く
<p>(あそびやお絵かきに高速道路がみられた)先生は計画して巻紙に高速道路を書きくことを試みる。</p> <p>子どもたちが描いている間にポ</p>	<p>H「ぼくいいこと考えたよ。板二つでできる方法」(KとMは二人でつくることにする。</p>	<p>かき終わった④の絵をみながら「あらお話ができそうね」</p>
<p>S「つなげよう」</p> <p>(K「くたびれちゃあ」</p>	<p>(男児四人が長い巻紙に高速道路をかいて、いろいろな種類の自動車をたくさん書いています)K「まめた線路かなくちゃあ」</p>	<p>④「タやけよ。これ白鳥なの」</p>
<p>「ああ、くたびれたらどなたか他の人に</p>	<p>「さあ、もつと長くしましょう。後略」といいながら、既にかいたところをまるめて、新たに白い部分ひろげる。</p>	<p>「おもしろいお話ができそうね」</p> <p>(組み板がたりなくなり、KとMがとり合う)</p> <p>「みんな仲よく使ってたね。ふたりで使うとか三人で使うとか、よくお話してね」</p> <p>「それもいいわね」</p>

⑤紙巻に	スターカラーを 出して、模造紙を 使う。	「少しあきてき て、絵の具の方に気 をとられる」	「かわればいいわ」 「さっきYちゃんた ち書きたいっていっ ていたけれど」
------	----------------------------	--------------------------------	--

①はかなり目標のはっきりした製作活動の場面であったが、(f)、(g)を母体に子どもたちは、さまざまな工夫をこらした鯉作りをすることができた。先生は創造性の成果をとりあげ、皆の前でほめてそれにこたえたが、「ほめることにより周囲の子どもにも作りたいという気持を起こさせ、作っている者に自信とよろこびを与え、より工夫を促している」(Thh)と思われる。

ここには、(f)による課題を焦点化する技法と質定的反応による成果を拡大化する技法とがみられる。

②は子どもの自発的創造活動に先生が「子どもたちの動きをみてすぐ役割を演じた」(Sm)場面である。「先生が花になった」とは、子どもの蜂になったという実感を大きくし、気持が十分満足され創造力を豊かなものにした」(Tt)であろうし、「子どもの思いつきを先生が一步先のものへと発展させた」(Oj)ここには、役割を分担することによる共通体験の技法がみられる。

③は、子どもが描き上げた絵に対して「感想や評価のことばで終わらないで一枚の絵の中に存する内部的子どもの心理を把握する点までもっていった」(Ym)場面であるが「絵からお話ができ

そこから更に発展する余地があるように思える」(Thh)それはとりもなおさず「絵を見ながら話すことは、その子どもが今考えていることやいいたいことを、絵からつかみ出すことができる」(Hn)からである。ここには絵を媒介とした誘導の技法がみられる。

④は、あそびが停滞するかにみえた場面での先生の助言が「あそびの発展と集団生活への適応仕方に発展」(Oj)をもたらしと同時に、Hに新たなヒントを生みだすきっかけになった。ここには、解決法を提案することによる解決領域を拡大する技法がみられる。

⑤は、先生が教材をさらに提供することによって、「創造性の持続時間をのばし、バスやバトカーを描くことにもまで発展した」(Sm)場面であり、「疲れたものに強制することなく、しかもその作業を続けるために別の提案」(Oj)をしたり「別の教材を用意することによってさらに創造性を発展させた」(Ym)場面である。ここには、新しい提案や方法を提示することによって役割を分化させて創造性の持続をはかる技法がみられる。

この五つの場面は、子どもと先生とが相互に信頼し合い、素直に振るまうところが共通しており、それが創造性を生み出す大切な基盤となっていることがうかがわれる。

まとめ

はじめて記録を読んだ時「先生は子どもを引きつけるのが上手であり自然である」ことが単に驚きの対象であったのが、次第に「うまみ」や「自然」が分析できるものであり発見を積み重ねるにつれ、自分のもののできるのだという認識が育ってきたようである。資料に即してよいものが見れるようになる。次に、Ktのように資料を「間的」把握して、自分の状況や考えを資料の中に挿入していくことが大切である。「準備するものがこれとちがったものであったら、これとちがった起重機、竿さお、電車ができたのであったでしょう。その園に合ったものを準備してこのような考えを受け入れたい」(Kt)「巻紙のかわりに、私だっただら新聞紙を利用して教室いっぱい新聞をひいてセロテープで止めて、それに思い切り描かせてみたいと思います」(Hk)これは、幼児を伸す基本的原理がおさえられた上で、その実践方法を自分で思考したところに大きな成長が見られる。

「五歳児の記録」は、その保育技術から学ぶところが多いとともに、それを読む者に大きな可能性をもたらすすぐれた教材であるということが出来る、この資料からさらにたくさん発見をしていくためにも、学生から出てきたいくつかの記録への注文を最後に列挙させていただきたい。

・皆で一緒に何かをする場合、例えば紙芝居とかお話の時などの場面を入れていただきたい。

・あそびと製作が中心なので、日常生活に対するしつけなど、例えば食事時、偏食している子どもに対してどのようにしているか知りたい。

・「探偵事務所」とはどんなものかわからないので、聞きなれないあそびなど説明は短くてよいですから、つけて欲しいと思います。

・歌はどのように指導しているのか知りたい。

・園全体の様子・園児について記して欲しい。もしできたなら、子どもの会話のところにその子の性格が記されておれば、その子の感情をもっと理解できたらうと思います。

・おもしろしをした時の先生の態度、そして園児たちのようすなども入れて欲しい。

注1 E・カーベントナー「レディネスとは」(「幼児の教育」第66巻第9号p38)

注2 K・H・リード、宮本美沙子訳「幼稚園」(フレーベル館昭和41年p44)

注3 H・ヘフアナン「幼稚園教育の重要性」(「幼児の教育」第66巻第9号p4) H. Heffernan "The Kindergarten Teacher", (D. C. Heath and company 1960. p. 4)

注4・5 津守真「幼稚園は何をするところか」(津守真、木原博子編「幼児の教育 原理と研究」フレーベル館 昭和42年



注6 前掲「幼稚園」(p 49)

注7 「幼児の教育」第64巻第6号、第65巻第1号、第3号、第

5号、第6号、第7号に掲載された、磯部景子、堀合文子、

津守真らのお茶の水女子大学附属幼稚園、「五歳児の記録」を  
さす。

注8 「幼児の教育」第64巻第2号に「五歳児の記録」に先だつ

「四歳児三学期の記録」が掲載された。冒頭に次のような主  
旨が述べられている。

「幼稚園で実際にどのようなことが行なわれているのかを、  
具体的にありのままに記録にとどめ、どのような順序を経  
て、子どもが力いっぱい活動し、その能力を展開するかを  
明らかにしたいと思ったのである。幼稚園で、子どもがどの  
ように活動し、教師はどのように指導していくかをみていた  
できれば幸である」

注9 私どもの大学では、三グループが三期に分かれて附属園で  
実習しているため、一グループが実習に出ている間、残りの  
二グループについて、教育実習に役立つゼミナールを行なっ  
ている。

注10 松村康平「看護心理の技法」を参考にした。

(郡山女子大学)

## 新刊保育図書

### 幼児の教育 原理と研究

津守 真 木原溥子編

本書は「幼児の教育」誌に掲載された論文をまとめたもの。  
幼児教育の原理から研究方法、記録、さらに制度上の問題  
までを、系統立てて編集したもの。最近の幼児教育の傾向  
を知る上にまた概論書としても適切である。

内容―第一章「幼児教育の課題」では幼児教育全般に  
かかる問題を扱う。第二章「幼児教育の原理と方法」  
では教育課程、指導計画、子どもを観察する技術など  
幼児教育の実際にあたってよりどころとなる論文を集  
めた。第三章「保育の中での研究活動」では、保育研  
究の基本論、さらに実践記録の具体例をのせてある。  
第四章「幼児教育制度をめぐって」は義務制の問題な  
ど制度上の問題を衝く論叢。

執筆者―牛島義友・及川ふみ・恩田 彰・斎藤文雄・  
坂元彦太郎・清水エミ子・莊司雅子・昇地三郎・鈴木  
正子・多田鉄雄・津守 真・樋口三紀子・日名子太郎  
・堀合文子・松村康平・水原泰介・山下俊郎・渡辺桂  
子他

A 5判 四三二ページ 六五〇円

発行 フレーベル館